

言語活動の充実に向けた新メディア学級通信づくりと ICT利活用によるPTAへの発信

長野県安曇野市立豊科南中学校 教諭 宮田 明

キーワード：PC、スマホ、タブレット、ICレコーダ、インターネット

1. はじめに

私の学級担任経験の中で感じていることは、やはり生徒たちの「コミュニケーション能力の不足」である。いじめ、不登校、学級崩壊など、様々な学校現場で起きている問題の一つの原因は、このコミュニケーション能力の不足であると思う。しかし、生徒一人一人と対話してみると、ほとんどの生徒たちは担任である私と何気ない会話ができ、コミュニケーションをとることができる。言い換えると、コミュニケーションをとる「きっかけ」があれば、じゅうぶん相手とやりとりできる生徒がほとんどなのである。

そこで、クラス内での生徒同士のコミュニケーションのきっかけとなるツールとして、私は「学級通信」を重要視し、これまで担任してきた全クラスで、最低でも週2回は発行を続けてきている。この学級通信の内容とそれによる生徒や保護者の姿、そして新たに私が入り組んでみた学級通信の新しいメディアへの挑戦について紹介させていただきたい。

2. 「文字のアルバム」学級通信づくり

学級通信を発行している担任の先生方は大勢いる。これから紹介する内容はすでに実践されている先生も多いだろうが、私が先輩の先生方から学んだり自ら考案したりした学級通信づくりの工夫についてである。

まずは「見出しの言葉の工夫」と「写真の多用」である。私は大学から大学院時代にかけて約4年間、地元の地方新聞社の編集局で派遣社員をしていた。そこで紙面を毎晩制作している社員の方々に教えていただいたことは、読者が本文を読みたくなるリード（見出し）をうつこと。そして、読者が最も目をとめやすいのは写真やイラストだということだった。これを学級通信にも生かし、生徒や保護者が読みたくなる見出しと、生徒たちの活動の様子がよく分かる写真を多く取り入れるように心がけている。

そして、最も大切にしているのは「生徒の日記の引用」である。クラスの様子や学校で起きていることを担任の言葉ばかりではなく、学校の主役である生徒の言葉で伝えること。さらに掲載した内容に信憑性を持たせるため、記述した生徒個人の名前を掲載することである。これによって、生徒が自分自身の文章に責任を持ち、「誰が今、何を思っているのか」が伝わりやすくなっていく。ここで重要なことは、ただ単に事実のみを日記に記述するのではなく、それを通して自分は何を感じているのか、これからどうしたいのかを書き残すように指導することである。そして、掲載されたクラスメイトの日記を読んで、自分はどうか考えたのかをまた日記を書くように助言する。

こういったやりとりが学級通信上で繰り返されることにより、クラス内にいわゆる生徒たちの「世論」が生まれてくるのである。まさにコミュニケーションのきっかけであり、今度は実際の会話へとつながっていくのである。またこの繰り返しのやりとりにより、話すことが苦手な生徒も文章による自己表現によって、周りの仲間へ自分の思いを伝えやすくなり、ふだん静かな生徒

に対して周りの生徒たちも話しかけるきっかけとなる。さらに、日記に仲間の良いところを褒めるように書く指導をすると、自分のことについて仲間が書いてくれた学級通信を読むことで、もっと色々な出来事を日記に書こうと努力するようになるのである。保護者も我が子のことを他の子が日記で褒めてくれるなんて、本当に嬉しいことだと思う。

最終的には、コミュニケーションのきっかけにとどまらず、生徒たちの文章力や表現力の向上へとつながり、いわゆるクラスの写真アルバムではなく、当時のいろんな思い出と感情が詰まった「文字のアルバム」が残されていくのである。

3. アナログ紙面からデジタル文書へ

新しいメディアへの学級通信の私の挑戦が始まった。保護者からよく耳にする言葉「うちの子は学校からのお便りを家でちゃんと出してくれなくて困ります。」この声に対応できる方法はないか考えたところ、私の従兄妹が通った県外の某中学校では、大切なお便りは学校からファックスで一斉送信するため、入学時に各家庭でファックス電話機を購入するという、十数年前に聞いた話を思い出した。時が経った現在、各家庭の多くはインターネット契約をしていたり、ほとんどの保護者が携帯電話やスマートフォンを所持したりしている。そこで、学級通信を電子文書化してインターネットで配信することにより、保護者の皆さんがいつでもどこでも読むことができるようになることを考えた。これが私の紙面の学級通信から新しいメディアへの第一歩だった。



写真1 デジタル版学級通信のQRコード

このデジタル版学級通信のメリットは、まずはとにかく保護者が確実に受け取れることである。そして、紙の省資源化につながる。昨今のエコロジーに基づく、紙の無駄遣い対策ができる。さらに学校の予算には限りがあり、配布書類は基本的にモノクロ印刷が主流で、学級通信をカラーで印刷するなんてとんでもない話である。しかし、デジタル版にしたことで、モノクロ印刷による紙面の荒れた写真やイラストに比べ、格段に高精細で美しい全面カラー画像での提供が可能となった。また、バックナンバーも取り出しやすく、生徒や保護者が後日あらためて過去の学級通信を読み返すことも容易になった。

なお、ここで問題視されやすい個人情報の流失への対策であるが、ファイルにパスワードをかけてPDF (Portable Document Format)形式にすることでセキュリティ対策ができ、情報量の縮小や情報改ざん対策においてもじゅうぶん適応ができた。

4. 活字から音声メディアへ

多くの先生方は分かると思うが、参観日の生徒たちの様子は、日常の姿とはけっこう違う。自分の親が見ている前で、いつもの自分らしさはなかなか出しにくい。また同じように、日記の文章に書く自分の言葉と、教室で友達や先生と交わす言葉ももちろん違ってくる。そんな「素の自分」をなんとか取り入れて「真の学級通信」として発行できないか試行錯誤してみた。

写真をお便りに掲載している先生方は大勢いる。しかし、写真や動画などカメラのレンズを向けることに対して、思春期の中学生の多くは苦手意識が強く、避けてしまったり素の自分が出せなかったりする。そして、個人情報流失と同様に、生徒の顔や動きについて肖像権侵害の問題も発生してくる。そこで、動画ではなく音声のみならば、なんとか可能ではないかと考えた。声だけならば、顔も見られないし、動作も映らない。思春期の中学生の生の様子を残したい学級通信として、活字の次にできそうなメディア「声の学級通信」という発想である。

いきなり生徒の声を録音するには抵抗があるだろうから、まずは活字で発行した学級通信を担当の私が朗読してICレコーダで録音し、mp3(MPEG audio layer 3)形式の音声ファイルにてインターネット配信をしてみた。さっそく保護者から「忙しいので、いつもお便りを溜めてから読んでいたが、今は家事をしながらイヤフォンで先生が読んでくれるお便りを聴いています」という好感触な声をいただいた。こんなスタートだった「声の学級通信」に生徒たちも慣れてきたようなので、いよいよ生徒にマイクを向けてみた。行事の感想や学校の様子、そしてもっと踏み込んで友達関係や恋愛のことまで、意外にも生徒はいつもの素の声で話してくれた。また、写生会やクラスマッチ、キャンプや修学旅行などの宿泊行事へレコーダを持参して現地レポートを収録したり、ついには担任の手を離れて生徒同士でマイクを向け合ったりして、インタビュー取材ができるようになってきた。こうして活字メディアの学級通信と併行しながら、音声メディアというもう一つの学級通信が軌道に乗ってきた。



写真2 地元ラジオ局との取材合戦の様子

5. 言語活動の充実に向けて

保護者から「声の学級通信は、家とはまったく違う我が子の声が聴けて楽しみです」という言葉をいただくようになり、このように発展させてきた新しい形の学級通信の存在がどこからか伝わったらしく、地元F

Mラジオ局が取材に訪れることとなった。音声メディアのラジオ局としては恰好のネタなのだろう。番組パーソナリティの方が生徒にマイクを向けると、意外にも流暢に話し始めた生徒たち。それどころか、逆に収録してやろうとマイクを向け始め、取材合戦が始まった。この模様はラジオ番組として放送され、もちろん我がクラスの声の学級通信としても配信されたのであった。

さらに状況は展開し、なんと生放送番組のスタジオで生徒たちが出演するという依頼までもいただいた。生徒たちが緊張しながらも楽しそうに生き生きとDJを務める勇姿に、教師冥利につきる私であった。

このように、紙面からスタートした学級通信が新しいメディアへと発展を遂げたことで、コミュニケーションのきっかけとなったことは言うまでもなく、生徒たちの言語活動の充実につながる我がクラスづくりの中核活動となっている。



写真3 地元ラジオ局での生放送出演の様子

6. 動く学級通信の導入

現在、また新たな試みとして、紙面に掲載されている写真にスマートフォンのカメラをかざすと、ワンポイント動画を見ることができるようになったAR (Augmented Reality) を始めてみた。出版や広告の世界では、実際の写真などに映像情報を付け加える形で、さまざまな演出が行われている。私の学級通信の紙面にも、各種行事の様子など様々な写真が掲載されるので、30秒程度のARを導入し、記事や写真とともに、生徒や保護者に動画も楽しんでいただき始めたところである。

7. おわりに

コミュニケーション能力不足の解消に向け、生徒同士の会話のきっかけを願って発行している学級通信を、こうして新しいメディアへと発展させて、現在進行形の状況である。このような活動を続けながら、より良いクラスづくりに向けて私は日々精進したいと思う。また、私が先輩の先生方から学んだように、後輩教師たちが私の実践から何かを得て、さらに進化した手だてを生み出して、生徒たちの前に立ってほしい。

この後、生徒には自分たちの中学校生活の足跡「文字のアルバム」「声のアルバム」学級通信を、DVDなどの形にして卒業の際に思い出の品としてプレゼントしようと考えている。彼らが大人になったいつか、懐かしく読み、聴く日が来て、中学生の自分に再会してくれることを心から願っている。